

# 保・幼・小の連携の現状と課題

浅見 均

青山学院女子短期大学子ども学科 教授

キーワード：保・幼・小連携、小一問題、滑らかな接続、スタートカリキュラム

## はじめに

ここ10年ほど、幼稚園と小学校における接続の問題が「小1問題」などと呼ばれ注目を浴び、マスコミなどでも取りざたされている。そのことは本研究紀要38号において拙著『「小1問題」についての一考察』に述べた。ここでは結びに、小学校1年生のクラスサイズを20～25名程度にすること、ティーム・ティーチングの導入、せめて1学期の間はゆったりとした移行期間としてカリキュラムに位置づけることなどを指摘した。本論文では、埼玉県のH市、福島県のK市の教員及び保育者へのアンケート調査などの結果を踏まえて、保・幼・小の連携の現状とこれからの課題について考察していく。

## 1. 保・幼・小の連携の現状

### (1) 交流活動を通しての連携

小一問題解消に向けて様々な取組みが行われているのは周知のとおりである。しかし、その取組みが効を奏しているといえるのかは疑わしい。

例えばH市では、平成21年度に教育委員会

が中心となり、市を挙げて保育所、幼稚園と小学校の連携をテーマに取り組んだ。当市は、市立の保育所が11、幼稚園1、私立の保育所5、幼稚園5で、小学校は公立のみ14である。そこでの連携の実態は①子ども間の交流 ②5年生が園訪問（総合学習） ③2年生が「あきまつり」に園児を招待（生活科） ④小学校の運動会への招待 ⑤教員間の交流 ⑥就学児の情報交換会（幼保へ、小へ） ⑦授業参観と懇談 ⑧園長、校長の交流 等が挙げられた。この内容を整理すると1. 子ども同士の交流であり、園児が小学校へ招かれたり、児童が幼稚園や保育所を訪ねたりというものであった。その中で「運動会」など行事に招待する参加型のものもある。これらの交流活動を通して「就学への不安が消える」「子ども同士のコミュニケーションのとり合いは体験学習であり、効果が大」などの回答を得ている。2. 教員間の交流においては、「教員が親睦をはかり、小学校が身近に感じられる」、「子どもの情報収集に役立っている」、「学級編成に役立たせている」などの効果を回答している。幼・保の意見として「交流の回数が多いほど児童、教員への親しみが持てる」というものがあつたが、交流が年に1、2回という例が少なくないようであり、交流の回数の少なさを指摘しているものとい

える。もっと日常的な普段着の交流が望まれるのであろうが、それぞれの保育、教育計画の中に位置づけることがなかなか難しいのが現状であり、年間行事予定に入れていくことが重要であるという指摘もあった。

では、福島県のK市では一体どのような取組みがなされているのだろうか。2010年5月の調査から見てみる。当市は人口約33万人で、認可保育所は私立14園・公立25園、認可外保育所52園、幼稚園は私立33園、小学校は公立56校、私立1校となっている。連携の実態は①子ども間の交流として小学校見学、小学生（1、2、6年生）との交流、行事への案内と参加。②教員間の交流としては、就学児の情報交換会、21年度より保・幼・小連携推進事業で相互参観、園長・校長との連携などを行っているなどの回答があった。これらはH市における内容とほぼ一緒である。H市は2009年度に県の研究助成を受けての研究的取組み、K市は2009年度から保・幼・小連携推進事業が発足ということで、力を入れていることが分かる。これらは流れとしては、「小1問題」を解消すべく滑らかな接続を目指すものとして歓迎されるが、年数回の実施状況などから推し量るに、教育委員会などの指導によって動いている感が否めない。そのことも重要ではあるが、現場が本気で動き出さなければ、なかなか成果は上がらないともいえよう。

## （2）要録送付による連携

もう一つの取組みとして、平成21年度より、幼稚園の小学校への「幼稚園幼児指導要録」に加えて保育所から小学校に入学する際にも、「保育所児童保育要録」を小学校に送付する

ことが義務づけられた（認定こども園は「認定こども園こども要録」）ことである。このことによって、平成21年度からは、就学前の保育施設に在籍していた園児については、小学校へ園在籍時の様子が送付されることになったのである。しかし、いくつかの課題を抱えている。第1に、送付される要録の形式（フォーム）が幼稚園、保育所それぞれに異なることである。それぞれの施設から送られてくる小学校ではきわめて参考にしにくい状況が発生している。第2に、送付の時期がある。1年生の学級編成などにも役立てるのであれば2月ごろには小学校に送られていないと不可能であるが、実態としては幼稚園で考えてみても、卒業式が終わってから記入を終わらせる。発送は3月25日以降というところが多いのではないだろうか。そうだとすると、なかなか資料を生かすにくい状況が発生しているといえるのではないか。H市やK市の調査でも小学校側の回答として「学級編成の資料にしている」、「入学当初の児童理解に活かしている」、「（4月以降であれば）問題が発生した時の資料」、「児童理解のために利用」、「特に参考にしたことはない」などの回答があったが、本音が見え隠れする結果である。

## 2. 保・幼・小の連携の課題

### —スタートカリキュラム—

#### （1）生活科を中心として

連携の現状を見てきたが、これらの取り組みは確かに必要なことであるとはいえるが、根本的な解決には繋がり難しいといわざるを得ないだろう。つまり、小学校や小学生に親しみを持つことは就学予定者としての5歳児に安心感を与えるがそれは気持ちの問題であり、

実際の学校生活が始まれば、すぐに座学が求められ、一定の時間黙って座って話を聞くことが求められる。そう考えると教員の保育場面見学などにより、どのような生活を送っているのかという現状認識は重要である。しかも、そこからさらに一歩進めて、入学後の生活のあり方を変えなくてはならないだろう。そこで課題となるのが滑らかな接続のためのスタートカリキュラムの作成ということになるだろう。入学後、すぐに座学が始まるのではなく、5歳、6歳児の発達からして無理のない入学当初のカリキュラムが編成されなくてはならないだろう。このことに関しては、平成20年に文部科学省より出されている「小学校学習指導要領解説 生活編」に興味深い内容が示されている。「改善の具体的事項」の(オ)において

- (オ) 幼児教育から小学校への円滑な接続を図る観点から、入学当初をはじめとして、生活科が中心的な役割を担いつつ、他教科等の内容を合わせて生活科を核とした単元を構成したり、他教科等においても、生活科と関連する内容を取り扱ったりする合科的・関連的な指導の一層の充実を図る。また、児童が自らの成長を実感できるよう低学年の児童が幼児と一緒に学習活動を行うことなどに配慮するとともに、教師の相互交流を通じて、指導内容や指導方法について理解を深めることも重要である。

と示している。つまり生活科を核として保育から小学校教育への円滑な接続を意図したものであり、「内容及び内容の取扱いの改善」においては、「⑤幼児教育及び他教科との接続」において、「学校生活への適応が図られるよう、合科的な指導を行うことなどの工夫により第1学年入学当初のカリキュラムをスター

トカリキュラムとして改善することとした。」と明言している。

ここで言う合科的な指導とはどういうことだろうか。「第4章指導計画の作成と内容の取扱い」の(3)において「生活科の学習は、教科の特性上、国語科、音楽科、図画工作科など他教科等との関連が深い」としている。例として「季節の変化と生活に関する学習活動」では、自然を観察したり、全身で感じたりする活動を通して、自然の変化、四季それぞれの美しさを強く感じ取ることが、言語的表現や、絵画的表現、音楽的表現などに発展する萌芽を含んでいるというのである。このことは、幼児教育の世界では当たり前の考え方である。幼児教育においては表現というくくりになると思われる。つまり、子どもが自然に身をおいたとき、環境から様々な働きかけを受ける。すると、子どもはそれを様々な形で表現したくなる。それは言語表現であったり、身体表現であったり、絵画表現であったり、音楽表現であったりする。生活科においては「表現したくなる気持ちにつながる」、「学習活動の動機付けとなったり」するというのであるが、幼児教育における子ども主体の考え方に一致する。小学校に望むことは、むりに教科につなげて表現させるというふうにはしないということである。

## (2) 遊びの導入・児童の思いや願いに寄り添う教師

さらに、生活科では「遊び」を取り入れることを提案しているのである。「生活科の内容」の(6)を見てみる。以下は抜粋である。

- (6) 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして、遊びや遊びに使う物を工夫してつくり、その面白さや自然の不思議さに気づき、みんなで遊びを楽しむことができるようにする。

児童は、目の前に砂場があれば、砂山を作りトンネルを掘る。近くに水があれば、それを流し、川に見立てて遊ぶ。また、友達が加われば、協力したり、競い合ったりしながら、遊びが次々と発展していく。ここには、自分から自然や物にかかわろうとする児童の姿や、より楽しく遊ぼうと知恵を出し合う姿などを見ることができる。そして、児童は遊びを通して、自分の思いや願いを実現し、満足感を得たり自分らしさを表出したりする。

ここではまさに、遊びによる授業を考えている。「児童は遊びを通して、自分の思いや願いを実現し、満足感を得たり自分らしさを表出したりする。」としているのである。ここでも、遊びの解釈を正しく行ってほしいと考える。遊びとは自発的なもので、いつ始まって、いつ終わってもよい自由なものであると言うことを肝に銘じておいてほしい。砂場遊びの時間で児童を砂場で遊ばせたということにならないことを願う。

「学習指導の進め方」においては、教師が「児童の思いや願いに寄り添う」ことが学習活動に多様な広がりを生み出す要因になるとしている。また、教師は「児童の姿を見守り支えながら、意欲と自身をもって生活しようとする児童の育成」に取り組むことが望まれるとしている。これらの内容は、まさに幼稚園教育要領の精神を受け継いでいるものである。今後に大いに期待したいものである。

### (3) スパイラルカリキュラムの提案

スタートカリキュラム作成に当たり考えたことは、小学校1、2年生のカリキュラムは、幼稚園や保育所でどのような生活や経験を積んできたのかというその土台の上に構築されるべきであるということである。経験は繰り返されていくが、それをスパイラルつまり螺旋上に子どもの経験が重ねられ、その経験の螺旋の渦は徐々に大きくなりながら上方へ広がって行くという考えである。これは、J. S. ブルーナーが『教育の過程』において述べている考え方であり、「前に学習したことを、上級学年でもっと高い水準で繰り返すやり方」<sup>(1)</sup>である。同じテーマで繰り返し出会うことがあっても、子どもの成長、発達の中で、同じ学習にはならず、より高次の学びになっていくという考えである。

生活科の単元を見ていくと、「生活科の内容」(7)に飼育栽培がある。

- (7) 動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心を持ち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気づき、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようにする。

というものである。これらのことは、幼稚園や保育所でも保育の中で経験してきているものである。例えば飼育はチャボを飼う、あるいはアヒルを飼う、ウサギを飼うなど。栽培では、野菜を育てている園もあれば、朝顔の種をまいたり、チューリップの球根を植えたり様々な形で保育の中で行われている。そのことを、小学校1、2年生で扱う内容に発展的に関連づけて考えていくことが子どもにとっては自然なことになるのではないかと思え

るのである。これらのことを幼稚園、保育所と小学校が交流し研修会を持ち、保育の中でどのようなことが育ち、それを受けて小学校低学年でどのように受け継ぎ発展させていくかということを考えていくといったようなことがまさに連携であり、まさに、スタートカリキュラムにふさわしいものになっていくのではないだろうか。

栽培で考えてみると、例えば朝顔の栽培でも、3歳で経験した「朝顔が沢山咲いている」という体験が4歳に発展し「青い朝顔や赤い朝顔や白い朝顔がある。花を搾ると色水ができる」という体験、5歳での「実際に種を撒き育てる」経験につながり、さらに1年生の経験につながっていくという、発展的に上昇していく渦巻き（スパイラル）のような連続性をもたせるという考え方である。生活科の解説の中では、「繰り返しかかわる学習活動」という表現が使われている。「繰り返すことによって、対象との関わりが深まり児童の気づきの質が高まる」という表現をしているが、近い概念であると思われる。

それぞれの発達に添った朝顔への関わりがあり、遊びがあり、気づきがあるのである。

このことは、先に述べた砂遊びにおいても当てはまる。例えば幼稚園では砂遊びは3歳から始まり、そこでのひとり遊び、平行遊びによる砂の性質への体験などがあり、4歳では小グループで山やトンネルを掘って遊び、5歳ともなると大勢で工事現場ごっこをして遊ぶ姿もある。それらの経験を踏まえて、1年生の砂遊び、2年生の砂遊びになっていく。繰り返しの中で気づきの質は高まって行く。ゆえに発達を踏まえた経験を連続した発展的に上昇していく渦巻きのカリキュラムで捉え

ることができる。

スパイラルカリキュラムは学習のみに偏らない。子どもの生活や、心の問題にも及ぶ。つまり、例えば幼稚園の3年間でどのような生活を送り、どのような心の育ちがあったのかということもしっかり捉え、1年生、2年生へと等身大の成長発達を考えるべきである。3歳児として入園し、園に慣れ、人間関係を徐々に構築し、5歳になると最年長者として3歳4歳児の面倒を見ていくところまで育ててきているのである。従って、1年生としては、さらにそれを発展させるような生活のあり方がなくてはならない。自立に向けてそのプライドを傷つけない対応が望まれる。

ここで言いたいことは、スタートカリキュラムを作るに当たっては、小学校だけで考えるのではなくて、地域の幼稚園や保育所などの幼児施設の体験していること、保育の内容、実態を捉え、スパイラルカリキュラムとして発展的に構造化していくことである。幼・保・小が交流を深め、相互理解する中で、共に考えて最良のスタートカリキュラムを作ることである。園児、児童の交流、保育者と小学校教員との情報交換を超えたところにあるのは滑らかな小学校への接続、子どもにとってギャップの少ない徐々に慣れていくスタートカリキュラムを作ることであると信じる。

#### 〈参考文献〉

- (1) J. S. ブルーナー著 鈴木祥蔵 佐藤三郎  
 (訳) 昭和38年『教育の過程』 岩波書店 17頁